

I think の日本語訳の分析

— アメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』の例をもとに —

小 林 隆

An Analysis of the Japanese Translation of the Complement Taking Clause *I think*:
From the Speech Data of American TV Dramas *Suits* and *The Mentalist*

Takashi KOBAYASHI

1. はじめに

多くの日本人英語学習者が「～と考えます」「～と思います」と英語で言いたいとき、「I think + that 補文節」(以下、「I think 補文節」¹と呼ぶ)の形を用いるように思う。実際、JEFLL(日本人英語学習者自由英作文コーパス)²を見ると、I think の頻度は他の類似表現 I guess, I suppose, maybe, probably, seem と比べて圧倒的に高い。COCA(現代アメリカ英語コーパス)³においても I think は高頻度であるが、書き言葉(ジャンルを FICTION, MAGAZINE, NEWSPAPER, ACADEMIC に限定)ではかなり頻度が落ちる。I think とその類似表現の頻度は、最もトークン数の少ない I suppose を1としたとき、次の図1のように示される(JEFLLとCOCAのI supposeのトークン数はそれぞれ5と9,381)。

JEFLL : <u>I think</u>	>	maybe	>	probably	>	I guess	>	seem	>	I suppose
408.6		88.8		8.4		4.8		3		1
COCA : maybe	>	seem	>	probably	>	I guess	>	<u>I think</u>	>	I suppose
12.3		7.4		9		2.2		1.2		1

図1 JEFLLとCOCAにおけるI thinkとその類似表現の頻度

日本人英語学習者にとってI thinkは使い勝手の良い表現であることが分かるが、COCAのデータよれば、I thinkは書き言葉ではあまり用いられない(COCAにおけるSPOKENのジャンルのI thinkの頻度は、上の図1の割合で29.6)。また森山(1992)と山岡(2011)は語用論的発話機能の観点から、日本語の「と思う」とI think補文節の対応について、《陳述》《報告》を目的とした「不確実表示用法」(e.g., 「入場者数は5000人だと思う」)ではほぼ対応するものの、《主張》《賞賛》《忠告》を目的とした「主観明示用法」(e.g., 「あの人はとても立派だと思う」)では多くの場合対応せず、《依頼》《謝罪》《感謝表明》《進行》を目的とした「主観伝達用法」(e.g., 「お礼を言いたいと思います」)ではI thinkが全く使えないことを議論している(日本語の例は山岡2011:100より引用)。筆者の担当する英語の授業においても、学生が英作文をI thinkで始めたり、ロールプレイで本人しか知りえない情報をI thinkで伝えたり、プレゼンテーションで多用されるたびに違和感を覚えるが、英語母語話者がI thinkを用いるときの感覚が分からず、適切に助言をすることができずにいる。

本稿の目的は、アメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』の字幕および吹き替えの

日本語訳の分析を通して、英語母語話者による I think 補文節の使用動機、つまり「英語母語話者は I think 補文節の形を用いて、何をしている（どのような認識・意図を伝えようとしている）のか」の一端を明らかにすることである。結論を先に述べると、I think の日本語訳において、話し手の「認識的」(epistemic) な態度が反映された訳 (e.g., 「(私は) と思う」) よりも、断定されたり (以下「断定」とする)、大幅に意識されるもの (以下「意識」とする) が多く見られた。さらに、字幕と吹き替えの両方に話し手の認識を示す表現を含む用例は、話し手の弱い確信が反映した用法と、逆に話し手の個人的な強い確信が反映した用法に分類できる。前者はさらに話し手による I think の使用動機の観点から、「話し手が本当に知らない／自信がないこと」を表すもの、「話し手が知ることのできないこと」を表すもの、「ポライトネス」を表すものの3つに分類できる。

以下、第2節で I think の先行研究を概観し、第3節でアメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』における日本語訳を分析し、第4節で本稿をまとめる。

2. 先行研究

I think に関する研究はこれまでに幅広い観点から行われており、その語用論的機能、通時的変化、韻律的特徴、第一言語獲得におけるプロセスなどが明らかにされてきた。I think 補文節は一人称主語 I と認識動詞 think で構成され、話し手の認識の向かう先が補文節で示される。Quirk et al. (1985) は I think, I believe, I guess など、挿入句的に用いられ、副詞のような続語的ふるまいをする表現をまとめて「評言節」(comment clause) と呼ぶ。Quirk らは評言節を6つのタイプに分けており、I think はその中でも「主節の母型節のような働き」(“like the matrix clause of a main clause” (ibid.: 1112)) をする、タイプ (i) に属する。タイプ (i) はさらに4つの意味的機能に分けられ、I think は主節の真偽値に対する話し手のためらいを示す、機能 (a) に属する (i.e. ヘッジ機能)。機能 (a) には I think の他に I believe, I guess, I expect, I feel, I hear, I presume, I assume などがある。機能 (b-d) はそれぞれ、I know, I claim, I see など話し手の確かさを表すもの、I hope, I wish, I'm glad to say など話し手の感情的態度を表すもの、you know, you see, mind you など聴者の注意を求めるものをいう。

I think は各構成要素の意味が強く反映された本来の用法 (1a) から、ヘッジとして補文節に対する話し手の認識的な態度を示す用法 (1b)、主節—従属節の関係が弱まり、談話のある側面をぼんやりさせる用法 (2) まで幅広い。

- (1) a. **I think** that politics is sleazy. (Fraser 2010: 29)
 b. **I think** thei=r motives must .. be pretty solid, (Kärkkäinen 2010: 212)
- (2) LISA : there was two days in a row though,
 cause there was one in Louisiana,
I think yesterday,
 and one the day before that in Kansas. (Kärkkäinen 2010: 214)

I think には、(1a) の本来の用法に代表されるような、話し手の考えの確かさを主張する deliberative な機能と、(1b) や (2) のような、ヘッジとして話し手の考えが不確かであること (話し手のためらい) を伝える tentative な機能がある (Aijmer 1997: 21)。Aijmer (1997) は Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論の観点より、前者は「他者によく思われたい」(自

身の欲求が他者にとって好ましいものであってほしい」という相手の「ポジティブ・フェイス」への配慮（と「共感」（“rapport”））を表し、後者は「他者から邪魔されたくない」という相手の「ネガティブ・フェイス」への配慮と関係すると述べている（ibid.: 22）。

I think はこれまでの研究でその韻律的特徴とその頻度も明らかにされている。Kaltenbock (2007, 2008) は、評言節の4種類の韻律構造（結合）のパターン（①独立（prosodically independent）、②左右の要素と結合（left-right binding）、③左の要素と結合（left-binding）、④右の要素と結合（right-binding））を示し、イギリス英語では③①②④の順で頻度が高いことを報告しているが、Kärkkäinen (2003) はアメリカ英語の日常的な自然談話では④が圧倒的で、次に①の頻度が高く、②と③はほぼ見られなかったことを報告している（Kärkkäinen 2010: 204）。イギリス英語とアメリカ英語における I think の韻律的実現形の違いはかなり大きいものであることが分かる。Kärkkäinen (2010) では I think の韻律的実現形と対応する意味機能について詳細に議論されているが、本稿で扱うデータ数は限定的であるため、I think の文中での生起位置、韻律的特徴、意味機能の分析については今後の課題としたい。

最後に I think 補文節の通時的変化と第一言語獲得について簡単に触れておく。米倉 (2010: 46) は Brinton (2008: 247) が示した I think の通時的変化を次の図2のようにまとめている。

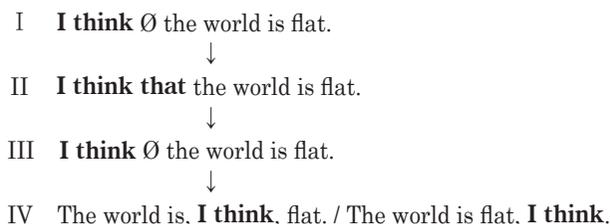


図2 I think の通時的変化（Brinton 2008 quoted in 米倉 2010）

古英語では並列構造（I）が先にあり、そのあとに従属構造（II）が発達したという考えが一般的であるという（米倉 2010: 47）。つまり単純に「従属構造（II）→並列構造（III）」を経て、出現位置が自由になった（IV）、というのではなく、（II）の前に並列構造（I）があった、ということが Brinton によって示された。

日本人英語学習者の多くが上の「II（従属構造の理解）→III（補文標識 that の省略）→IV（談話的機能の習得）」の順で習得するであろう。しかし Diesel and Tomasello (2010) によると子どもの第一言語獲得における順序はその逆で、I think の挿入的用法は主節としての用法よりも早い時期に獲得されるという。

以上、先行研究において I think の意味、語用論的機能、通時的変化、韻律的特徴、第一言語獲得における特徴が議論され、かなり幅広い観点から I think の特徴が明らかにされてきたことを示した。先行研究により、I think が統語的には副詞的なふるまいをすること、意味的にはヘッジとして自身の発話へのコミットメントを弱めること、逆に自身の考えであることを強調すること、韻律的には周囲の要素と結合したり逆に独立する傾向にあること、通時的には that のない形から that がつき、また that がなくなるという変化であることが分かった。しかし日本人英語学習者にとって、「どのような場面、あるいは話し手がどのような認識のときに挿入的な I think を用いるのか」「自信のなさを表す I think と、自身の考えの確かさを強調する I think はどのように使い分けるのか」「各用法はどのように発音すればよいのか」（といった英語母語話者の感覚）はよく分から

ない。⁴ 次節では、2つのアメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』で用いられた I think 補文節の例とその日本語訳（字幕・吹き替え）を分析し、英語母語話者による I think 補文節の使用動機を探る。

3. I think の日本語訳の分析：テレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』の字幕・吹き替えを用いて

本節ではアメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』で用いられた I think 補文節の日本語字幕および吹き替えを分析し、そこに反映された言語的・文脈的特徴を示す。

3.1. 英語の表現に対応する日本語字幕・吹き替えを分析することの利点と意義

英語のテレビドラマで用いられる I think 補文節の日本語訳（日本語字幕・吹き替え）を分析する利点・意義として、次の3点を挙げる。

- (i) 分析者にとって文脈がクリアであること
- (ii) データに客観性があること
- (iii) 字幕と吹き替えの両方を分析することで I think の認識的態度が強く反映された箇所を特定できること

先行研究における I think の意味機能的・韻律的分析は、自然談話の大規模コーパスを用いて行われるものがほとんどであり、それが理想とされているが、非英語母語話者には、当該発話とその前後を見て、会話の参加者の人間関係や話の流れ、話し手の発話の意図などを正確にくみ取るとは極めて困難である。しかしテレビドラマであれば登場人物の人間関係、話の流れ、話し手（あるいは脚本家）の意図がクリアで理解が容易である。

上記の (i) の問題点を解決するため、筆者はこれまで実際にアメリカで採取した大学生による自然発話データを用いて、英語の談話標識や評言節の分析を行ってきた。しかし個人情報保護の観点から公開が不可能なデータであるため、その分析結果の客観性を担保することができない。そこで、本研究ではアメリカのテレビドラマの中でも特に有名なものを選ぶことで、データの客観性を確保する。

当然のことであるが、字幕と吹き替えは異なる。保坂（2016）は字幕翻訳の特徴をまとめており、字幕には文字数に制限があり、元のセリフの43%が失われることが実証的に示されていると（ペイカー&サルダーニャ編 [藤濤監訳 2013]）指摘する。また梁瀬（2013）も映画8作品（原語はすべて英語）を分析し、翻訳と字幕の文字数の比が4：6程度であると述べている。字幕の情報が必ずしも重要なものであるとは限らないが（Gottlieb 1992 quoted in 保坂 2016：44）、I think を含む発話が字幕と吹き替えの両方で認識的な訳がなされたとき、それは訳者が I think が伝える話し手の認識的態度を強く感じ取ったことを示していると言える。

3.2. 分析方法

I think 補文節の発話データは、アメリカの法廷ドラマ『Suits』のシーズン1、計12エピソード（2011.6～2011.9 米国放送）と刑事ドラマ『The Mentalist』のシーズン1、計23エピソード（2008.9～2009.5 米国放送）から採取した。各ドラマにおける「一人称代名詞+現在形動詞+ that / Ø 補文節」の高頻度のタイプとそのトークン数を示す。

表1 『Suits』と『The Mentalist』における「一人称代名詞+現在形動詞+ that / Ø 補文節」

『Suits』 シーズン1 (12エピソード)			『The Mentalist』 シーズン1 (23エピソード)		
1.	I think ...	66	1.	I think ...	70
2.	I know ...	38	2.	I guess ...	47
3.	I don't think ...	14	3.	I know ...	35
4.	I guess ...	11	4.	I don't (do not) think ...	12
5.	I see ...	6	5.	I hope ...	10
6.	I assume ..., I believe ...,	各5	6.	I expect ..., I suppose ...	各9
8.	I hear ..., I say ..., I suggest ..., I wish ...	各4	8.	I believe ..., I bet ..., I promise ..., I understand ..., I wish ...	各5

表1を見ると2つのテレビドラマで高頻度のタイプが共通していることが分かる。I think が圧倒的で、その次に I know, I don't think, I guess が続いている。2つのテレビドラマ間のエピソード数が倍近く異なっているが、各タイプのトークン数を比較するとほぼ影響がないと考えてよい。Kärkkäinen (2010) ではアメリカ英語のコーパス SBCSAE (Santa Barbara Corpus of Spoken American English) を分析し、I think が最も多く (無計画の日常会話814分の発話データにおいて約3分に1回の頻度)、少し頻度を下げて I don't know, I know, I thought が続き、その次の I guess のあと大きく頻度を下げて I don't think が続いたことを報告している。表1のデータにおいても、I think が圧倒的で、I know と I guess がそれに続き、その次の I don't think のトークン数が落ち込んでいることから、Kärkkäinen (2010) のアメリカ英語の分析とほぼ同じ傾向が見られたと言っ

てよい。
 本稿では、頻度のもっとも高い I think に焦点を絞り、字幕と吹き替え表現における日本語訳の特徴を分析する。まずは I think の補文節あるいは I think が直接言及する節の中に、法助動詞や法副詞など話し手の認識的態度を示す表現を含むものを除外した。例えば、次に示すような should や might が補文節内に含まれる事例である。

- (3) a. Yeah. In fact **I think** that we should have a date night to celebrate. (Suits, S1EP4, 962)
 (字「じゃあデートでお祝いしよう」；吹「お祝いに食事にでも行きたいなって思っ」)
- b. And **I think** he might even be interested in pursuing a case like this. (Suits, S1EP1, 1536)
 (字「動いてくれるだろう」；吹「動いてくれるだろうなあ」)

上記のような例を除外するのは、I think 以外に認識的態度を示す表現が補文節に含まれると、字幕・吹き替えに現れた話し手の認識的態度がどちらに由来するのかの判別が難しいためである。さらに will や be going to などの未来表現も日本語訳に影響を及ぼすと考え、分析対象から除外した。その結果、『Suits』では38トークン、『The Mentalist』では57トークンを分析対象とした。

分析対象を限定したあと、最初に字幕の訳を調べ、下に示す (i) ~ (iv) のラベルをつけて分類した。そのあとに吹き替えの訳を見て字幕と同じラベルに該当する場合はそのままにし、異なるラベルに該当する場合は吹き替えのラベルを当該トークンのラベルとした。

- | 【ラベル】 | 【特徴】 |
|-----------------|--|
| (i) 「なし (カット)」 | ... 話し手の認識的態度を表す表現なし。I think を含む発話全体がカットされている。 |
| (ii) 「なし (意識)」 | ... 話し手の認識的態度を表す表現なし。I think を含む発話全体が意識されていて、英語と日本語の語彙の意味に類似の関係がほぼ見られない。 |
| (iii) 「なし (断定)」 | ... 話し手の認識的態度を表す表現なし。基本的に言い切りの形。 |
| (iv) 「あり」 | ... 話し手の認識的態度を表す表現あり。 |
| (iv) 「あり (吹)」 | ... 吹き替えのみに話し手の認識的態度を表す表現あり。 |
| (v) 「あり (両)」 | ... 字幕と吹き替えの両方に話し手の認識的態度を表す表現あり。 |

上のラベルおよびその特徴に基づいて分類した結果を下の表2と表3に示す。

表2 『Suits』の字幕・吹き替えにおける話し手の認識的態度の有無 (n=38)

あり (9) 27%	あり (両)	2	なし (カット)	2	なし (29) 76%
	あり (吹)	7	なし (意識)	17	
			なし (断定)	10	

表3 『The Mentalist』の字幕・吹き替えにおける話し手の認識的態度の有無 (n=57)

あり (24) 42%	あり (両)	13	なし (カット)	3	なし (33) 58%
	あり (吹)	11	なし (意識)	9	
			なし (断定)	21	

表2と表3より、I think 補文節は「～と思う」などの話し手の認識的態度が反映した訳になるよりも、断定されたり、意識される傾向にあることが分かる。以下に、断定、意識、カットの例をそれぞれ1例ずつ示す。

- (4) 01 Lisbon: Go ahead. Say it.
 →02 Jane: **I think** he's telling the truth.
 (字「事実を言ってる」；吹「事実を話してる」)
 03 Lisbon: And I disagree. I'm charging him.
 04 Jane: No. Yes. Good. That's good. Go ahead. You got more than enough evidence.
 (*The Mentalist*, S1EP2, 513)
- (5) 01 Louis: So this is what happens when you promote the wrong guy to senior partner.
 02 Harvey: If you hadn't gone to Stensland behind my back, this wouldn't have happened.
 03 Louis: You don't know that. And I'm a member of this firm just as much as you.
 →04 Harvey: Oh, **I think** we both agree that you're a member. (*Suits*, S1EP3, 835)
 (字「職位は低いがな」；吹「ああ、俺より下だがな」)

(4) は断定、(5) は意識の例である。(4) はCBIの捜査官(リーダー)のLisbonとCBIに犯罪コンサルタントとして捜査に協力しているJaneの間の会話で、Lisbonが容疑者の取り調べを終え

たあと (Jane は別室で観察) Jane に (少し挑戦的に) 意見を求める場面から始まっている (発話01)。Jane は自身の考えを伝え、Lisbon がそれに反対している (発話03)。

(5) の会話は法律事務所の一室で交わされ、同じ事務所で働く Louis と Harvey、そして上司の Jessica の3名が参加者である。発話01では、Jessica が決めた Harvey の昇進を快く思っていない Louis が、Harvey とクライアントとの間に生じたいざこざをもとに、Jessica に対して Harvey の昇進が誤りであることを暗に伝えている。Harvey はそのいざこざの原因は Louis にあると非難し (発話02)、Louis は自分も事務所の一員であり会社のために行動を起こしたと主張している (発話03)。Harvey は Louis が自分と同じく事務所の一員であることを強調することで (*we both agree that you're a member*)、暗に自身の地位が上であり、相手が下であることを「会話の含意」(conversational implicature) として伝えている (cf. Grice 1989)。文字通りの意味ではなく、含意が訳された例である。

次の (6) はカットの例である。

- (6) Harvey: Sorry to ruin your little brunch, but *I think* you know damn well that you can't legally address my clients. (*Suits*, S1EP9, 680)
(字「ランチを邪魔して悪いが 原告との直接交渉はマズいぞ」；吹「ランチの邪魔をして申し訳ないが うちのクライアントと勝手に話すのは法的に禁じられている」)

(6) の参加者は (5) と同じ Harvey、その部下の Mike、そして訴訟相手の弁護士 Tanner である。Harvey と Mike は Tanner が自分たちのクライアント (A とする) と同じ会食会場にいることを不審に思い、Tanner と A との接触は法律で禁じられていることを忠告する場面である。*I think you know damn well that* に相当する台詞が日本語訳ではカットされている。

表2と表3の数字を見ると、認識的態度を表す I think があるのにも関わらず、それが訳出されないために言い切りの訳が多く見られる。以下に I think と I don't think の全体に占める断定の訳の割合を示す。

I think ... 『Suits』 26% (38トークン中10)；『The Mentalist』 37% (57トークン中21)

I don't think ... 『Suits』 0% (7トークン中0)；『The Mentalist』 10% (10トークン中1)

否定形の I don't think と比較すると、I think の認識的態度は訳出されないことが多いことが分かる。ただ、I guess の断定の割合が『Suits』で36% (11トークン中4)、『The Mentalist』で23% (31トークン中7) であり、断定は I think に特化した (idiosyncratic な) 特徴とは言えない。

ここで字幕と吹き替えの両方で話し手の認識的態度が反映された例の、形式的特徴と意味的特徴について述べる。「あり (両)」の15のトークンのうち、吹き替えの方に「たぶん」「確か」「おそらく」など副詞的要素として含まれたものが5、「みたい」「だなあ」「でしょう」「はず」など動詞語幹の要素に反映されたものが5、直訳の「と思う」が4、動詞の言い換えが1、であった。先行研究のところで、I think にはヘッジとして命題内容に対する話し手のコミットメントを弱める機能と逆に話し手の考えであることを強く主張する機能があることを述べたが、「あり (両)」の訳にもその両方が見られた。15トークンの意味的特徴は次の図3のように示すことができる。

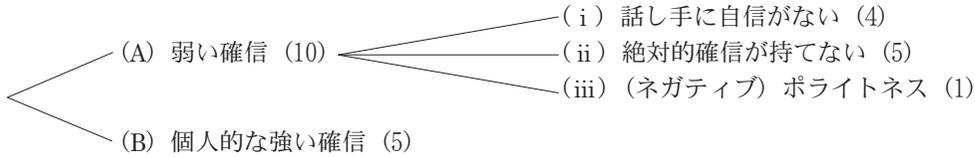


図3 「あり (両)」の意味的特徴

「あり (両)」に見られた、話し手の態度は、(A)「弱い確信」と(B)「強い確信」に分けられる(括弧内の数字はトークン数を表す)。弱い確信の背景にある動機はさらに(i)～(iii)に分けられる。次の(7)のI thinkは(A)(i)の例で、話し手は補文節の内容は酔っ払って覚えていないので、確信が持てていない。TrevorとMikeがホテルの一室にいて、互いに泥酔して昨晚のことをよく覚えておらず、Mikeが自分たちの居場所をTrevorに聞いている。

- (7) Mike: Hey, where are we?
 Trevor: Uh, *I think* we're in Hoboken. (Suits, S1EP5, 619)
 (字「ホーボーケンかな」；吹「あー、たぶんホーボーケン」)

Mikeの質問に対してTrevorはI thinkによって確信のなさを伝えているが、(A)(i)の4つの例のすべてが、相手の質問(wh疑問文とyes/no疑問文)に対する回答として用いられていた。

次の(8)と(9)は(A)(ii)の例で、(8)では話し手が本当に携帯を忘れたかどうかは話し手には断定不可能であり、(9)ではheで表された人物が慣れた(used to)かどうかは、話し手には確信が持てない内容である。

- (8) *I think* I left my phone in your office. (The Mentalist, S1EP1, 559)
 (字「電話を忘れたらしくて」；吹「携帯を忘れたみたいなんです」)

- (9) Jane: Is that when your brother started acting out?
 Kristina: He missed dad a lot, and suddenly...
 He was the man of the house, and *I think* he just wasn't used to it.
 (字「一家の主になって困惑したんでしょう」；吹「一家の主になって戸惑ったんだと思う」)
 That's when Jeremy moved in, and he's scary. He's very dangerous.
 (The Mentalist, S1EP7, 257)

次の(10)は、相手の発話に含まれた情報に対して話し手が修正をかけている(「他者修正」(cf. Schegloff et al. 1977)の)場面である。

- (10) Jane: No? What's the general opinion? Who did this?
 Mandy: My guess?
 Jane: Yeah.
 Mandy: Victor.
 Rigsby: What makes you think that?

Mandy: Nothing, really. I mean, Victor's a nice guy, but that's who kills women, isn't it?
Their husbands, 90% of the time.

Rigsby: 70% , **I think**. (字「70ぐらいです」; 吹「7割です、おそらく」)

Mandy: Hmm.

Jane: He's right. (The Mentalist, S1EP15, 238)

I think の発話の前に Mandy が「妻殺しの 9 割が夫によるもの（だから Victor が犯人だと思う）」と発話していて、捜査官である Rigsby が「7 割である」ことを I think を伴う発話によって伝えている。I think を含む発話は、相手が主張の根拠として提示した内容 (*Their husbands, 90% of the time.*) に対して修正をかけるもので、話し手は *It's 70%* と断定するのではなく、I think を発話することによって自身の発話の発語内の力（主張）を弱めている。自身の発話にヘッジをかけて発話へのコミットメントを弱めることは相手のネガティブ・フェイスへの配慮となるため (Brown and Levinson 1987)、例 (10) の I think はネガティブ・ポライトネスの機能として分析した。

最後に図 3 (B) の「個人的な強い確信」を表す例を挙げる。次の (11) の例は捜査官の Lisbon が容疑者で写真家の Jeremy に取り調べをしている場面で、話し手 Lisbon は被害者の娘である Kristina に会ったことがあるという強い確信を I think によって伝えている（大文字の I THINK と MET は強勢を表す）。

(11) Lisbon: Do you know Kristina Frye?

Jeremy: Uh... That name is familiar, but no.

Lisbon: I don't think so. She's rosemary's psychic.

And **I THINK** you have MET Kristina. You took her photograph.

(字「会ったこともあるはずよ」; 吹「会ったことあるはず」)

(The Mentalist, S1EP7, 528)

次の (12) も話し手の強い個人的な確信を表す I think の例である。相手の発話内容に対して不同意を表したあと (*I don't think so.*)、話し手が自身の考えを述べている。それが話し手の個人的な確信であることは最後の「目で分かる」(*It's in her eyes.*) という発話から分かる。

(12) A sheriff: Well, even if that's true, maybe it's blocked because she killed Kara.

Jane: Well, it's possible. I don't think so. **I think** she's a victim.

(字「彼女も被害者だと思う」; 吹「ニコールは ... 被害者でしょう」)

A sheriff: How can you tell?

Jane: It's in her eyes. (The Mentalist, S1EP5, 308)

強い個人的な確信を表す I think の特徴としては、(11) のように I think に強勢がついたり、(12) のように相手の主張・考えとの対比として発話されたり、話し手が「今から大事な話がある」というような大げさな雰囲気を出す、などが見られた。

3.3. 分析のまとめ

アメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』の日本語字幕・吹き替えの分析を通して、英語の I think 補文節の話し手の認識的態度は断定や意識によってその多くが日本語訳に反映

されない傾向にあることが分かった。そして字幕と吹き替えの両方を認識的態度が反映されたものには、相手の質問・確認に対して確信が持てないことを表すもの、話し手が真実を知りようのないもの（として示しているもの）があり、1トークンのみであるが、ネガティブ・ポライトネスとして話し手の確信のなさを伝えるものがあった。また I think に強勢がついたり、他者の想定とは異なるものとして自身の想定を示すときに用いられたり、大事な話をするような雰囲気のあるときにも、I think が持つ認識的態度（話し手の強い個人的確信）が日本語に訳される傾向が見られた。

4. おわりに

日本人英語学習者は「と思う」の逐語訳として I think 補文節を用いる傾向があるが、不自然な英語となることもしばしばある。先行研究では、I think 補文節に話し手の「ためらい」と「慎重さ」を伝える用法があることが明らかになっているが、確信のなさを伝えるのと逆に確かさを主張する用法の使い分けは非英語母語話者には容易ではなく、その具体的な場面はこれまでに示されてこなかった。本稿では英語母語話者による I think 補文節の使用動機の一部を明らかにするため、アメリカのテレビドラマ『Suits』と『The Mentalist』の字幕・吹き替えでどのように訳されるのかを分析し、その特徴を指摘した。I think 補文節は断定や意識によって、話し手の認識的態度は日本語訳では省かれることが多いこと、逆に話し手の認識的態度が訳に現れるときは、(wh 疑問文や yes/no 疑問文による相手の質問・確認) への返答に際して話し手の確信のなさを示したり、話し手が断定できないことを示したり、相手の想定と自身の想定が異なるときに (I think に強勢がついて) 話し手の考えが強調されるときであった。

【注】

1. 本稿では I think の補文標識 that が省略されたもの、I think のスコープに節以外が入るものも分析対象とし (e.g., (10))、それらを踏まえて便宜的に「I think 補文節」と呼ぶことにする。
2. Japanese EFL Learner Corpus (<https://scnweb.japanknowledge.com/~jefl103/cgi-bin/login1jf.cgi>)
3. Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>)
4. Baumgarten and House (2010) は英語母語話者による英語の会話と EFL 学習者による英語の会話 (被験者はすべて20代の大学生) で用いられる I think を比較・分析し、EFL 学習者は英語母語話者よりも補文標識 that の省略が多いこと、「ためらい」(tentative use) と「慎重さ」(deliberative use) の使い分けに意識的でなかったことを示している。

【参考文献】

- Aijmer, Karin (1997) "I think - an English Modal Particle," *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives*, ed. by Toril Swan and Olaf Jansen Westvik, 1-47, Mouton de Gruyter, Berlin; New York.
- ベイカー, M. & サルダーニャ, G. (編集) 藤濤文子 (監訳) (2013) 『翻訳研究のキーワード』 研究社, 東京.
- Baumgarten, Nicole and Juliane House (2010) "I think and I don't know in English as Lingua Franca and Native English Discourse," *Journal of Pragmatics* 42, 1184-1200.
- Brinton, Laurel J. (2008) *The Comment Clauses in English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Diesel, Holger and Michael Tomasello (2001) "The Acquisition of Finite Complement Clauses in English: A Corpus Based Analysis," *Cognitive Linguistics* 12, 97-141.

- Fraser, Bruce (2010) “Pragmatic Competence: The Case of Hedging,” *New Approaches to Hedging*, ed. by Gunther Kaltenböck, Wiltrud Mihatsch, and Stefan Schneider, 15–34, Emerald, Bingley.
- Gottlieb, Henrik (1992) “Subtitling: A New University Discipline,” ed. by Dollerup & Loddegaard, *Teaching Translation and Interpreting: Training, Talent and Experience*, John Benjamins, Philadelphia.
- Grice, Paul H. (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- 保坂敏子 (2016) 「字幕翻訳で失われる要素—言語教育との関わりを考える—」『日本語と日本語教育』No.44 (2016.3), 41–57.
- Kaltenböck, Gunther (2007) “Position, Prosody, and Scope: The Case of English Comment Clauses,” *Vienna English Working Papers (VIEWS)* 16 (1), 3–38.
- Kaltenböck, Gunther (2008) “Prosody and Function of English Comment Clauses,” *Folia Linguistica* 42 (1–2), 83–134.
- Kärkkäinen, Elise (2003) *Epistemic Stance in English Conversation. A Description of its Interactional Functions, with a Focus on ‘I think,’* John Benjamins, Amsterdam.
- Kärkkäinen, Elise (2010) “Position and Scope of Epistemic Phrases in Planned and Unplanned American English,” *New Approaches to Hedging*, ed. by Gunther Kaltenböck, Wiltrud Mihatsch, and Stefan Schneider, 203–236, Emerald, Bingley.
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』第11巻第9号, 105–116.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Schegloff, E. A., G. Jefferson & H. Sacks (1977) “The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation.” *Language* 53(2), 361–382.
- 山岡政紀 (2011) 「「と思う」構文の発話機能に関する対照研究」『日本語コミュニケーション研究論集』第1号, 93–102.
- 梁瀬みき (2013) 「字幕と吹き替えの比較」『日本文学』109, 127–143.
- 米倉綽 (2010) 「第2章 古英語に Comment clause は存在するか」『Comment Clause の史的研究—その機能と発達—』, 秋元実治 (編), 29–50, 英潮社フェニックス, 東京.

【謝辞】

本研究は文部科学省科研費「若手研究」(19K13224)の助成を受けて行われている。

